

紹介

The Art of Egypt through the Ages

Ross の編纂にかゝる圖版集で、解説本文は前後を通して僅かに九〇頁を充たないが、圖版はその約三倍にも及んで居る。七葉の精巧な原色版と共に相當珍しいもの或は従來有りふれたものながら角度をかへて撮影したものが含まれて居る。唯現存の場所は示されて居ながら、大きさが一部分のみしか表はされて居ないのは遺憾である。

解説本文は、王朝前、初期王朝時代 Peet、古王国Hall、中間時代及び中王期 Blackman、ヒクソス時代新王國 Newberry、ツートアンクアメンの治世 Carter、サイト、フトレミー、ローマ時代 Gardner、ユブト時代 Gaselle、回教建築 Creswell、同美術工藝 Arnold 等々、それら、専攻者の手に成る簡潔にして、要を得たものである。尤も以上の区分は何を標準として定めたるものか。ツート

アンク・アメンに一項を與へたのは圖版の比較的多いためであらうか。サイト、フトレミー、ローマを一括したのはギリシヤの要素より觀たためであるか。斯かる著述の稍々もすれば陥り易い全體に互る統一を缺く恨みがあるは拒みがない。且、埃及の地に古來起伏した主調を異にした文化に育まれた美術を一貫して看る事が如何程度義があるか、又、この書が此の點に於て果して如何程度功して居るかに就いては、問題が残されて居ると思ふ。従つてこの書を直ちに純學術的とは認め難いが、しかも譬へば第二王朝と第三王朝との間に文化的に可成りの³²を認め、第三王朝に於て始めて石造家屋がありとし又、通常、溝彫柱 (fluted column) の古い型として Peni Hassan の夫が擧げられるが、附柱 (engaged column) としては既に第三王朝にあり、叢生柱 (fasciated column) は同じく zoser のピラミッド神殿南列柱 (colonnade) にあつて、蔭を束ねた態なるを注意してある。次に Madrasa の十字型プランは通常シリヤより傳はるとされて居るが一二七〇年以前にシリヤに建てられたものに此の型なく

一二六三年 Barbans に據つて築造されたものが始めて十字型をなす事を説いて居る等、單なる解説叙述には止まらなで専門的見解の片鱗が隨所に現はれて居る。

要するに、埃及に於ける古來の文化、即ちファラオ、アレクサンドリヤ、基督教、回教の四個の文化に表はれた美術を通觀する一般的著作として恰好のものと考えらる。(Studio Intl. London 1931) (岡島)

ソコロフスキー著 西藏探檢秘史
内 田 寛 一譯

本書はロシア國立地學協會幹事ソコロフスキー氏

(G. N. Sokolovskiy) が同協會機關雜誌第六十卷第一冊に掲載した『中央アジア探檢史の中から』『教父フランシスコレディアゼウエドの旅行』の翻譯にして、ロシア人バイカロフ氏の助を藉られて成り、其の探檢の主要な地域が西藏を中心とし、且つ其の探檢の結果が未だ廣く世に知られてゐなかつたところから、便宜上題して西藏探檢秘史と名づけ出されたものである。

蓋し世界探檢史上於けるゼスキット教宣教師達の貢獻

は偉大なるものがあつたが、世界最大大陸たるアジア洲の未だ知られざりし内陸部も亦傳道を志しつゝ、彼等の探檢を行つた領域であつたのであつて、彼等の齎した結果は歴史地理學上價値ある材料となつてゐる。従つて彼等の提供した材料も次第に研究されつゝあつたのであるが、爰にまた久しく未着手のまゝになつてゐたホルトガルの宣教師アゼウエド氏の探檢の結果が明にされ、それによつて中央探檢史の貴重なる資料を得たのみならず、第十七世紀頃の該地方の状態も推察されるのであつて、早速其の邦譯書を得たことは我等の最も喜とするところである。

本書は先づ史上に於けるアゼウエド氏の位置と其の西藏探檢の意義を解明し、次にアゼウエド氏のアグラから西藏に到る行程に於ける熱心な觀察によつて見聞したる自然の状態並に住民の風俗習慣やさては遭遇したる危難に就いても述べ、次に斷片的乍ら西藏の宗教・政治・商業の事情及び風習を明にし、次にツアラバンに於ける宣教師の成功すべくもなきを察し困難なる旅を續けてラダーク